

権力が道徳基盤の活性に及ぼす影響の検討

伊藤 岳史

【問題・目的】

近年、強く問題視されているパワハラに代表されるような権力者による非道徳的な行動はなぜ引き起こされるのだろうか。本研究では、権力者が非道徳的行動を起こす際の心的メカニズムについて社会心理学における従来の権力研究に道徳基盤理論という道徳心理学的知見を交えて明らかにすることを目的として実施された。

道徳基盤理論によれば、人間は5つの道徳基盤(ケア・公正・権威・忠誠・神聖)に基づいて道徳的な判断を行っており、どの基盤に強く依拠するかは個人によって異なる。また、依拠する道徳基盤が変遷することをモラリティー・シフティングと呼ぶ。本研究では、権力保持者が非道徳的行動、特にパワハラを引き起こす際に、その行動に対する道徳判断において利他性や公平性に基づくケア・公正基盤から権威への服従や内集団に対する忠誠に関する権威・忠誠基盤にモラリティー・シフティングが生じるという仮説を立て、その仮説を2つの研究を通して実証しようと試みた。

【研究1】

研究1では、権力感が5つの道徳基盤の活性にどのような影響を及ぼすのか検討することを目的とした。併せて実際の道徳的行動や自己中心性との関連も検討した。

まず、権力想起課題を用いた権力プライミングによって参加者を3条件(権力高・権力低・統制)に分け、道徳基盤に関する質問紙である日本語版 MFQ を実施した。その結果、権力低条件と比べ、権力高条件では忠誠基盤のみ有意傾向ではあるが活性したということが判明した。また、実際の道徳的行動や自己中心性に対しての権力感の影響は見られなかった。権威基盤が活性しなかったことに関する原因として、研究1で操作した権力感が一時的な権力感であったこと、そして、実験参加者の属性の偏りや個々人の権力観を考慮に入れなかったことによる権力操作の弱さを挙げた。権力観とは、権力を何のために使うべきかという信念を指す。権力観は「権力は自分のために使うべきである」という信念に基づく私的権力観と「権力は他者のために使うべきである」という信念に基づく公的権力観に大きく分けられる。

【研究2】

研究2では、1つ目に権力が道徳基盤の活性に及ぼす影響について、権力観による影響を考慮するなど研究1とは異なった方法で検討すること、そして2つ目に権力感と権力観がパワハラへの嫌悪度に及ぼす影響を検討することを目的として実施された。

最初に参加者に対して権力観尺度を実施し、次に職場想起課題、およびパワハラ嫌悪度尺度を行った。回答後、日本語版 MFQ を実施し、最後に職場でのパワハラの有無に関する質問と参加者の特性的な権力感についての質問を行った。

その結果、権力高群では、権力低群と比べてケア・権威・忠誠基盤が活性したということが判明した。ケア基盤の活性に関しては、権力高群における偽善的傾向や自分をより良く見せようとする傾向の高さが原因として考えられる。権力観に関しては、公的権力観群において、私的権力観群よりもケア・公正基盤が活性したということも示された。パワハラ嫌悪度に及ぼす影響について、パワハラを受けたことがある人のみを対象に分析をした結果、ケア・公正基盤への依拠のみが強い人の方が、権威・忠誠基盤への依拠

のみ強い人よりもパワハラ嫌悪度が高いということが判明した。また、公的権力観群において私的権力観群よりもパワハラ嫌悪度は高いことが分かった。

【総合考察】

2つの研究を通して、ケア基盤については偽善的傾向との関連など議論の余地があるものの、権力が権威・忠誠基盤を活性させること、そしてパワハラを受けた経験がある人においてではあるが、権威・忠誠基盤にのみ依拠している人はケア・公正基盤にのみ依拠している人よりもパワハラ嫌悪度が低いという結果が得られた。この結果から、権力がモラルティニー・シフティングを引き起こし、権威・忠誠基盤を活性させる可能性が本研究によって示された。非道徳的行動を引き起こす際の権力保持者の心的メカニズムについては、権力保持者は自らの非道徳的行動を権威・忠誠基盤に従った道徳的行動であると感じていることが示唆される。(社会心理学)